



## British Trad Review No. 4

### NEWS

(担当 兵衛 充孝)

・多くの想いを残し、サンディ・デニーがこの世を去った。4月24日夜、友人宅の階段から転げ落ち、意識不明のうちに脳内出血を引き起こし、そのまま息を引き取った。彼女には8ヶ月になる子供のジョージアもあり、近々のうちに夫君トレイヴァー・ルーカスと共にアメリカへ移住し、新たな活動を始める計画を立てていたようだ。

・フェアポート・コンベンションは、新作“Tipplers Tales”のプロモートを兼ねて、5月14日、ロンドンのロイヤルティ・シアターで公演を行なった。公演は好評で、特筆すべきことは、サイモン・ニコルがあのMatty Grovesを歌いあげていたことだ。

・2作目が好評のバトルフィールド・バンド(1作目は本紙vol.2で森氏が紹介済み)は、惜しまれつつ8月に解散することを発表。なお来春には新ラインアップによるバトルフィールドが登場の予定。

・3枚のレコードを残して解散したエレクトリック・トラッド・バンド、J・S・Dバンドが再編成された模様。

・ティヴ・スウォーウリックのサード・ソロ・アルバムが Sonet レーベルから発売される。内容は不明。

・エレクトリック、オーセンティックを問わず、エンジニアとして活躍し、リビングストーン・スタジオの所有者でもあるニック・キンゼイ(Nic Kinsey)の家が火災にみまわれ、ニック自身も全治数ヶ月の大火傷を負った。この結果、彼のエンジニアリングにより作製される予定の数枚のアルバムの製作が遅れる見込み。その中にはジョン・カーワトリックのソロ・アルバムも含まれている。

・上記の記事と関連して、伝エレクトリック・トラッド界の雄マリコルヌ(Malicorne)のリーダーのガブリエル・ヤコブ(Gabriel Yacoub)は、マリコルヌの第5作の構想を練るため渡英した。が、エンジニアのニックが大火傷を負ったため、計画は延期された。なおヤコブは、Batton Noir レーベルからソロ・アルバム“Trad. Arr.”を発表したばかり。

・ファイヴ・ハンド・リールのニュー・アルバムを出したばかりのデック・ゴッパンのソロ・アルバムが Topic から発売される。タイトルは“Gaughan”の予定。

・アイルランドで人気の高いクラナーダ(Claannad)がライブ・アルバムを発表。

# BRITISH REPORT

## 英国ある記

(小川 彰)

英国では、春が訪れると共に毎週のように全国各地で Folk Camp を含んだ Folk Festival が開催されます。今頃、アーティスト達は、フェスティバルと Folk Club の両方に、東奔西走していることでしょう。

私が英国を訪れたのは、英国人にとってはその正反対の動きのない時期、1月から2月末にかけての50日間でした。もちろん夏の英国のことなど知る由もありませんが、少なくとも私にとって、この時期はフォークを聞いて回るのに、また、英国らしさを感じるのに最もよい季節だったようにも思われました。ロンドンの30日間など、生気にももう何か月も居座っているような気分になって歩き回ったものです。昼少し前にホテルを出て、PUBで一杯やって—最初のころはサンドイッチ屋だったのですが、通い慣れた Piccadilly で降りて、Foylesの本屋をのぞいて Dobell's や Collet's のレコード屋へ回ってなど毎度繰り返してもあきることのない行程でした。

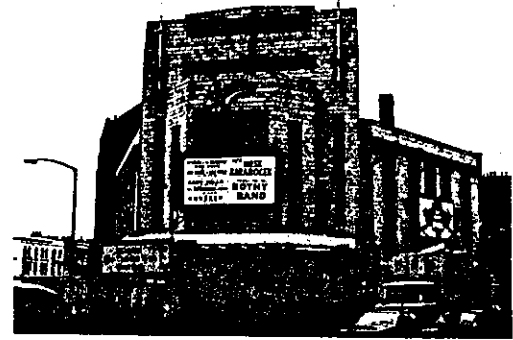
フォークの状況はというと、冬場でも大そうな活況というべく、数十に及びロンドンないし近郊のフォーク・クラブでは、ほとんどの夜に、どこかしらでレコードなどで頼んだ人達が出演していましたし、各地に散らばる数えきれないくらいのクラブのどこかには、ぜひ聞きたいと思う人達が毎晩出演しているといった具合で。それに、The Bothy Band と Steeleye Span のツアーに出会うこともできました。

《ポスター・バンドと

スティーライ・スパン》

The Bothy Band のツアーは、1月末の Sheffield から始まり、少しずつ南下してきてラストの会場が、2月10日の Rainbow Theater でした。Rainbow というのは、Eric Clapton のライブ・レコーディングなどであなじみの劇場なのですが、ロンドンにならどこにでもあるといった古いすすけたブロック積み建物の、周りの閑散とした街並からしても、むしろ The Bothy Band にはとても似合っているように思われました。屋は人としてあまり行き交わらない、変色してあせたレンガの二軒長屋の並ぶこの Finsbury Park 地下鉄駅が、Piccadilly から15分と離れていないというのも、コンサートの夜になるとそんな所にも若い人達が押しかけるといふのもやや奇妙な異味つきなロンドンという街故のことです。

このコンサートには、当初フルートの Matt Molloy が静養のため同行していないという噂がありました。



元気に登場し、最近のメンバーは全員そろっていました。それに正式なメンバーではないと思いますが、もうひとり若いフルート奏者が加わって始まりました。前半は Tríona の歌を中心とした構成、後半はほとんど切れ目なくダンス曲が奏されるといった内容で、Tríona がクラヴィネットとボーランを使いわけた他は、Matt Molloy はフルート、Paddy Keenan はウィリーパイプ、Kevin Burke はフィドル、Donal Lunny はブザーキ、Michael O'Donnail はギターとほとんどひとつに専ら演奏を行ないました。ただ、この晩は Tríona の声の方は、あまり調子がよくなかったのか、ソロアルバムで聞かれる素朴かつ張りのある歌が聞かれない少し残念でした。歌の方では、しかし無伴奏で合唱された Fionnghuala が絶品だったと思います。このコンサートの真価は後半の演奏にありました。Paddy Keenan のパイプをみごとに同化した、Reel, Jig の連続は全く見事なもので、かえって会場からは手拍子ひとつ聞かれない程でした。

彼らはアイルランドのグループに往々感じられる楽しむことができればそれ以上のものは望まない理のバンドではなく、コンサート・ホールで観客を圧倒してゆくことのできるバンドにまでなったといつてよいと思います。

コンサートのあとの報道で、Donal Lunny が「もっと大きな音を出して派手にやってみたい」といような事を言っているのは理解できません。The Bothy Band は、今までやってきた Trad への姿勢を極めて行ってくれるに違いないとは思いますが、

一方、Steeleye Span の方は7年余にわたって英国のフォーク・ロック畑の中心バンドの解散コンサ-

トということで早くから売り切れになり、当日には多くのダフ屋が出るといった評判がりでした。ロンドンの彼らの公演は2月17、18日、これもロック・コンサートの会場として頻りに使われる市街地としては西のはずれにあたる Hammersmith の Odeon で行なわれました。メンバーには、John Kirkpatrick と Martin Carthy もまだ加わっているということでかなり期待して2日間共に出かけました。

が、Hark! The Village Waits から Ten Man Mop までの Steeleye を少なからず期待した人達にとっては、この両日ともそれをすっかり裏切るコンサートになってしまいました。Martin, John が去年 Steeleye に加わった時、目指した姿は決してこのようなものではなかったはずですが、何とも節操のない Nigel Pegrum のドラムスを筆頭に、Rick Kemp のベースも Ashley Hutchings のころの控えめなものではなく、Martin にしてみれば、舞台の一番隅までだんだん遠ざかるようにしてプレイするような気持にならざるをえなかったのでしょう。曲の方もほとんど最近のアルバムからのもので構成され、かつて親んできた古い曲は披露してくれませんでした。解散すべく解散にまで至ったという感のこのコンサートの中でただひとり John Kirkpatrick のボタン・アコーディオンの技術はきわだっていたし態度も立派なものだったと思

ます。特に Seventeen Come Sunday などでは素晴らしいソロ・プレイを聞かせてくれました。それと Maddy Prior の妖艶さにてあうことができたのがせめてもの救いであつたというコンサートでした。

解散後の彼らについて少し言っておくと、Maddy は5月にすべて自作というレコードを Ian Anderson 達のプロデュースで発表し、ソロ活動にはいるはずですが、Martin は解散直後からソロ・コンサートをを行なったりしています。John は Sue Harris との活動をメインに、いろんな Trad の場所に顔を出してくれることと思います。自作中心のアルバム作りを考えているということでもあります。あとの3人の中では Tim Hart が写真家に転向する他は、それぞれ音楽活動を続けるということです。

#### 《ケルト系バンドの隆興》

The Bothy Bandに限らず、滞在中、グループとしての活躍をしていたのは、スコットランド・アイルランドのバンドが多かったようです。カール・ダラス（メロディ・メイカーのフォーク・欄担当）の言っている「フォーク・ロックは終わった」というのが示すように今のところ Steeleye の解散と共にエレクトリック・フォーク・バンドの存在がほとんどイングランドから消滅した（Albion Band も最近やや大げさなアルバムを発表しました）のに対し、今まで、帯に短し襷に長し、



のようにとられていたアイルランドから Trad に対して真摯なグループが英国フォーク界全体に足をおろしはじめたようです。The Bothy Bandの他にアイルランドでは、De Dannan, Clannad, Olsin, Chanter (NMM '85月号の山岸伸一さんの記事あり) といったバンドが、英国内のフェスティバルで活躍しているようですし、スコットランドのバンドでは、2枚目のアルバムを Topic から出した The Battlefield Band, 元 Contra Band のメンバーを含む Ossian, Alan Mac-Loed の加入した The Tannahill Weavers, Whistle-binkies などが全英国内的な動きをしています。そして、しばらくは彼らが Trad 界をリードしていきそうな気がします。と共にイングランドからも、再び Trad へ真摯な態度を示してくれるグループが出てくるのを期待しています。

#### 《 Folk Club のこと 》

前にあげた2つのバンドの他のフォーク状況は、冬の時期はすべてフォーク・クラブでの活動に集約されます。フォーク・クラブのことを少し説明しておきますと、連判は何もその専用にあるわけではなく、( Cecil Sharp House の Cellar のような例外もありますが ) 一般のバブの別荘といった場所で行なわれます。大抵の開催は8時頃になっていますが、まず30分は遅れると聞いていいようです。入場料は場所、ゲストの

知名度などによってちがいますが、20ペンスから80ペンスといったところで、その他に、村風の Bar でビールを飲んで一杯30ペンスくらいのものですからかなり安上りな娯楽といえます。演奏はまず Resident といってレギュラーの人達が2、3曲やり、そのあと数人の Floor Singer (だれでも参加できる場合が多い) がひとり2、3曲ずつ歌ってから、その晩のゲストが出てくるという具合で、それまでに観客はすっかりくつろいでいるという感じです。終演は大体11時半頃になり、その間、飾り気のない PUB のホールで、やや酔いかまわりながら見知らぬ隣の人と話をしながら演奏を楽しむというのは、(わくわく) (かたい) 毎晩の楽しみでした。

そんな雰囲気の中に、Robin & Barry Dransfield, The Watsons, Nic Jones, June Tabor をはじめとして様々な Trad を聞くことが、英国人にとっては別段変わったことではないとは何とも羨ましい限りとの心残りと共に英国を去って来ました。

そして、突然の訪問にもこころよく迎えて下さった Folk Review の Fred Woods さんや、Duffield の Free Reed Record の人達などのことを思い浮かべながら、再び英国の土をじかに感じられる日の来るのを心待ちにしています。



# LAST STEELEYE

マーティン・カーシーがジョン・カーワトリックを伴ってステイーライに復帰するというニュースは、近年のエレクトリック・トラッドに失望していた彼々を狂喜させました。新生フェアポートに失望させられた直後だけになおさらでした。そして期待のニュー・アルバム「Storm Force Ten」(Chrysalis CHR1151)が11月に発表されましたが、それは以前のマーティンを知る者には信じられないようなロック色の強いアルバムでした。

このステイーライに到りたい気さつは次のようなものだったそうです。77年5月にピーター・ナイトとボブ・ジョンソンの2人はステイーライをぬけることも発表しました。彼等は、Lord Dunsanyのファンタジー小説「The King Of Elfland's Daughter」をモチーフに使ったオリジナルのロック・オペラ・アルバムを作る計画を持っていました。脱退の発表の4日後、マディがマーティンに電話をかけ、再加入しないかと誘ったところ、彼は同意し、ジョン・カーワトリックも入れることを提案しました。そして2人は半年間という条件のもとで参加しました。つまりこのステイーライは解散を前提にしたものだったのです。

9月に前作同様、税金の安いオランダでアルバムを録音し、その録音は、とても短い時間で、そしてほとんど「Live」でとられました。マーティンは再びエレキ・ギターをとることに喜び、新しいギター・スタイルを考案したそうです。



さて次に、小川氏がとってきてくれたテープと氏の話から、彼等のステージの様相を書いてみましょう。

- ① False Knight On The Road ② Galtee Farmer  
 ③ The Victory ④ Saucy Sailor ⑤ The Black Freighter ⑥ New ⑦ Sweep, Chimney Sweep  
 ⑧ New ⑨ Awake, Awake ⑩ Bonnets So Blue  
 ⑪ New ⑫ Sweet Swansea ⑬ Treadmill Song  
 ⑭ Instrumental Medley — Scottish Tune ~ English Tune (Walter Bulwer's Polkas, Nos 2 and 1)  
 ⑮ Cam Ye O'er Frae France ⑯ Seventeen Come Sunday ⑰ Rave On

コンサートは、マーティンのリードボーカルで①から始まります。間奏では、ジョンが「Monks March」を入れ、そこでマディが登場して後半のリードをとりまします。①はニュー・アルバムの無伴奏曲ですが、歌いだしを失敗して、やりなおし。ステージで無伴奏の曲を演る時は、マーティンがギターの弦を弾いてその音に合わせるそうです。(ちなみに、ウォータースズもこの方法をとっているそうです。) ②は、マーティンのアコースティック・ギターのソロで、ジョンがひざに鈴をつけ、両手に白いハンカチ(?)を持ってモーリス・ダンスを踊ります。③で初めてジョンのボーカルが聴け、④では、彼のアコースティック・ギターが活躍します。このPolkaは「Albion Sunrise」の間奏に使われた曲です。

⑤はあなじみの曲ですが、レコードに較べるとかなりドラマチックに歌っています。この曲の後、マーティンが「Bass Good!!」と叫びますが、ちなみに、リック・ケンアがハッチングスの代わりにステイーライに加わった理由は、マーティンといっしょに演奏したかったからなのです。「だれも僕に、彼がやめたなんて教えてくれなかったんだ。だから彼といっしょに演るのには5年半待たなければならなかった……」

⑥はコンサートのハイライトで、ニュー・アルバムでも特にめだつた曲でしたが、ステージの最後を飾るのにふさわしい曲です。⑦はアンコールで、この曲はTen Man Mopの頃、シングルで発表された無伴奏曲で、パディ・ホリーのヒット曲をアレンジしたものです。

全体的にみて、このステージは、バランスのとれていないロック・バンドという感が強く、時にプログラムのドラムスはどうしようもありません。また、ニュー・アルバムの曲はレコードと寸分変わらず、あまりおもしろくありません(⑧は除く)。しかし、新曲の中にはなかなか良い曲もありましたから、発表されるとうわさされているライブ・アルバムに多少期待しています。

(瑛 仁)

# SONGS

## "The Wife of The Soldier"

as sung by Martin Carthy  
in his album "Byker Hill" Topic 12TS342

What did the wife of the soldier get  
From the ancient city of Prague?  
From Prague she got a linen shirt  
It matched her skirt  
Did the linen shirt  
That she got from the city of Prague.

What did the wife of the soldier get  
From Brussels the Belgian town?  
From Brussels she got the delicate lace  
Oh the charm and the grace  
Of the delicate lace  
That she got from the Belgian town.

What did the wife of the soldier get  
From Paris the city of light?  
From Paris she got the silken dress  
All to possess  
The silken dress  
That she got from the city of light.

What did the wife of the soldier get  
From Libya's desert sands?  
From Libya the little charm  
Around her arm  
She wore the charm  
That she got from the desert sands.

What did the wife of the soldier get  
From Rossia's distant steps?  
From Rossia she got the widow's veil  
And the end of the tale  
Is the widow's veil  
That she got from the distant steps.

1. 兵士の妻は何を得しや  
古えの都プラハより  
プラハより麻の上衣を得たり  
彼女のスカートに似合いたる  
その麻の上衣は  
彼女が都プラハより得し
2. 兵士の妻は何を得しや  
ベルギーの街ブリッセルより  
ブリッセルより妙なるレースを得たり  
ああ 魅するかな 優雅かな  
妙なるレースよ  
彼女がベルギーの街より得し
3. 兵士の妻は何を得しや  
光の都パリより  
パリより絹の衣を得たり  
我が物になしたるかな  
絹の衣よ  
彼女が光の都より得し
4. 兵士の妻は何を得しや  
リビアの寂しき砂漠より  
リビアより小さき護符を得たり  
腕のまわりにめぐらして  
護符を飾りたり  
彼女が寂しき砂漠より得し
5. 兵士の妻は何を得しや  
ロシアのはるかなる草原より  
ロシアより喪服を得たり  
物語の最後は  
そは喪服なり  
彼女がはるかなる草原より得し

《解説》

音の高低のほとんどないメロデーを持つこの歌が調べ美しく聞こえる理由について:

その1. 韻律について;

英語には大別して trochaic = /X と iambic = X/ の2つのリズムがある (/ = アクセントのあるシラブル, X = アクセントのないシラブル)。trochaicは最初にアクセントが置かれるので、たとえば音符で表わすと ♪♪♪... という形になり、軽快な、ダンスに適したムードを出す。同時に狂歌で洗練された感じになる。iambicの場合は、音符では ♪♪♪♪となり、重々しい感じで音自体としては落ちつく。さて、Verse 1 を例にとってみると、(L1~2) "What did the wife

of the | sol dier | get from the | an cient | city of | Prague?" (L3~6) "From Prague | she got | a lin | en shirt | it | matched | her | skirt | did the | lin | en shirt | that she got | from the an | cient city | of Prague!" つまり L1~2 の間は trochaic、L3~6 の各々の部分は iambic に統一されているので、音の高低がほとんどなくても均正のとれたリズムにより美しく聞こえるのである。特に trochaic から iambic に変わる L2~3 の調へは、優美である。歌詩にも、それぞれの韻律は言うまでもなく適合している。

その2. 押韻について;

完成された押韻も美しい調べを作り出す。この歌の押韻のパターンを書き出してみると次のようになる。

V-1	V-2	V-3	V-4	V-5
— get	— get	— get	— get	— get
— ΔPrave	— Δ town	— Δ light	— Δ sands	— Δ steps
— o shirt	— o lace	— o dress	— o charm	— o veil
— o skirt	— o grace	— o posses	— o arm	— o tale
— o shirt	— o lace	— o dress	— o charm	— o veil
— Δ shirt	— Δ town	— Δ light	— Δ sands	— Δ steps

(東野 和子)

## NEW ALBUMS LIST

* FUNGUS / MUSHROOMS	NEGRAM	5N	064
* THE CAMELTOWN PIPE BAND / MULL OF KINTYNE	AIR	CHM	1183
* THE WATERSONS / SOUND SOUND	TOPIC	12TS	346
* THE ALBION BAND / RISE UP LIKE THE SUN	HARVEST	SHSP	4092
* THE TANNAHILL WEAVERS / THE OLD WOMAN'S DANCE	PLANT LIFE	PLR	010
* FAIRPORT CONVENTION / TIPPLER'S TALES	VERTIGO	9102	022
* VARIOUS ARTISTS / LAMBS ON THE GREEN HILL	TOPIC	12TS	369
* VARIOUS ARTISTS / SHETLAND FOLK FIDDLING VOL. 2	TOPIC	12TS	376
* BATTLEFIELD BAND / AT THE FRONT	TOPIC	12TS	381
* BANDOGGS	TRANSATLANTIC	LTRA	504
* DUBLINERS / ANTHOLOGY	TRANSATLANTIC	MTRA	2010
* FIVE HAND REEL / EARL O' MORAY	RCA	PL	25150
* PAUL BRETT / INTERLIFE	RCA	PL	25149
* GAY & TERRY WOODS / TENDER HOOKS	ROCKBURGH	ROC	104
* HEDGEHOG PIE / JUST ACT NORMAL	RUBBER	RUB	024
* LINDISFARNE / BACK & FORTH	MERCURY	9109	609
* JOHN REILLY / THE BONNY GREEN TREE	TOPIC	12TS	359
* SHIRLEY & DOLLY COLLINS / FOR AS MANY AS WILL	TOPIC	12TS	380
* NEW VICTORY BAND / ONE MORE DANCE AND THEN...	TOPIC	12TS	382
* KEVIN BURKE / IF THE CAP FITS	ROCKBURGH	ROC	105
* CHIEFTAINS / LIVE	CLADDAGH	CC	21
* CHIEFTAINS / SEVEN	CLADDAGH	CC	24
* VARIOUS ARTISTS / DULCIMER PLAYERS	LEADER	LTRA	502
* TOM LENIHAN / PADDY'S PANALEA	TOPIC	12TS	363
* CATHAL MCCONNELL / ON LOUGH ERNE'S SHORE	TOPIC	12TS	377
* HORSLEIPS / HAPPY TO MEET SORRY TO PART	DJH	DJF	20544
* HORSLEIPS / THE TAIN	DJH	DJF	20543

# BALLADS

## "Long Lankin"

as sung by Martin Carthy  
in his album "But Two Came By" Topic 12 TS 343

Says my lord to my lady  
As he mounted his horse;  
"Beware of Long Lankin  
That lives in the moss."

Says my Lord to my lady  
As he went on his way;  
"Beware of Long Lankin  
That lives in the hay."

"See the doors are all bolted  
See the windows were pinned  
And leave not a crack  
For the mouse to creep in."

Oh the doors were all bolted  
All the windows were pinned  
But at a small peep in the window  
Long Lankin crept in.

"Where's the lord of this household?"  
Cries Long Lankin.  
"He's away up to London."  
Says the false nurse to him.

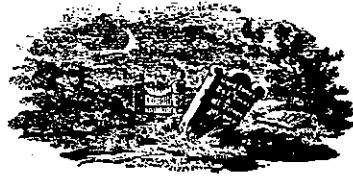
"Where's the lady of this household?"  
Cries Long Lankin.  
"She's asleep in her chamber."  
Says the false nurse to him.

"Where's the heir of this household?"  
Cries Long Lankin.  
"He's asleep in his cradle."  
Says the false nurse to him.

"We'll pinch him and we'll prick him  
All over with a pin.  
And that'll make my lady  
To come down to him."

1. 馬に乗りながら  
ご主人様が奥様に言いました  
「沼地に住んでいる  
ロンク・ランキンに気をつけなさい」
2. 立ち去りながら  
ご主人様が奥様に言いました  
「干し草の中に住んでいる  
ロンク・ランキンに気をつけなさい」
3. 「戸がかんぬきで全部締めてあるか見なさい  
窓を全部くぎで留めてあるか見なさい  
ねずみ一匹忍び込むような  
すきまも残してはならないぞ」
4. 戸には全部かんぬきが掛けられました  
窓は全部くぎで留められました  
でも窓の小さなぞき穴から  
ロンク・ランキンは忍び込みました
5. 「この屋敷の主人はどこにいるのだ」  
ロンク・ランキンは叫びます  
「彼はロンドンに出かけました」  
不実な乳母が答えました
6. 「この屋敷の夫人はどこにいるのだ」  
ロンク・ランキンは叫びます  
「彼女は寝室で眠っています」  
不実な乳母が答えました
7. 「この屋敷の後継ぎはどこにいるのだ」  
ロンク・ランキンは叫びます  
「彼はゆりかごの中で眠っています」  
不実な乳母が答えました
8. 「さあ、彼の体中に  
針を突き刺すのだ  
そうすれば私の夫人は  
彼のところへ降りてくるだろう」





So they pinched him and they pricked him  
All over with the pin.  
And the false nurse held the basin  
For the blood to drip in.

"Oh nurse how you slumber?  
Oh nurse how you sleep?  
You leave my little son  
To cry and to weep."

"Oh nurse how you slumber?  
Oh nurse how you snore?  
You leave my little baby  
To cry and to roar."

"Oh I've tried him with the milk,  
And I've tried him with the pap.  
Come down my pretty lady,  
And rock him in your lap."

"Oh I've tried him with the rattle,  
I've tried him with the bell.  
Come down my pretty lady,  
And rock him yourself."

"How dare I come down  
In the dead of the night?  
When there's no candles burning  
Nor no fires alight."

"You have three silver gowns  
All bright as the sun.  
Come down my pretty lady  
All by the light of one."

Oh the lady came downstairs  
She was thinkin' no harm.  
Long Lankin the stood ready  
For to catch her in his arms.

9. そこで二人は彼の体を  
針で突き刺しました  
そして不実な乳母はたらいを持って  
したたる血を受け止めました

10. 「乳母よ、なんて夢みているの  
乳母よ、なんて眠っているの  
あなたは私の小さな息子を  
泣き叫ばしておくのね」

11. 「乳母よ、なんて夢みているの  
乳母よ、なんていびきをかいているの  
あなたは私の小さな赤ん坊を  
叫びわめかせておくのね」

12. 「私は彼に乳を飲ませました  
パンがゆも食べさせました  
降りて来て下さい、私の美しい奥様  
そして彼をあなたのひざの上で揺すって下さい」

13. 「私は彼をがらがらであやしました  
私は彼をベルであやしました  
降りて来て下さい、私の美しい奥様  
そしてご自身で彼を揺すって下さい」

14. 「なんで降りて行けるでしょう  
夜の夜中に  
ろうそくの火もともっていないのに  
暖炉の火もくべてないのに」

15. 「あなたは三つの銀色のガウンを持っています  
お日様のように光り輝くガウンを  
私の美しい奥様、降りて来て下さい  
そのうち一つの明りをたよって」

16. 奥様は階段を降りて来ました  
彼女は危険を感じていませんでした  
ロンク・ランキンが彼女を腕の中に捕えようと  
待ち構えていました

There's blood in the kitchen.  
There's blood in the hall.  
There's blood in parlour.  
Where my lady did fall.

Her handmaid stood up  
At the window so high.  
And she saw her lord and master  
Come riding close by.

"Oh master, oh master  
Don't lay no blame on me.  
'Twas the false nurse and Lankin  
That killed your lady."

"Oh master, oh master  
Don't lay no blame on me.  
'Twas the false nurse and Lankin  
That killed your baby."

Long Lankin shall be hanged  
On the gallows so high  
And the false nurse shall be burned  
In the fire close by.

17. 台所に血が流れました  
広間に血が流れました  
居間に血が流れました  
そこに私の奥様は倒れました

18. 彼女の女中は高い窓へに  
立ち上がりました  
すると彼女の主人の領主が  
馬を近づけて来るのが見えました

19. 「ああ、ご主人様、ご主人様  
私を責めないで下さい  
あなたの奥様を殺したのは  
不実な乳母とランキンなのです」

20. 「ああ、ご主人様、ご主人様  
私を責めないで下さい  
あなたの赤ん坊を殺したのは  
不実な乳母とランキンなのです」

21. ロング・ランキンは吊されるでしょう  
高い高い絞首台で  
そして不実の乳母は焼かれるでしょう  
そのそばの火の中で



# BOOKS

今回は、トラッド音楽を少しでも深く理解しようとする時の糸口、あるいは手引書となる様な、日本語に訳された本を数冊紹介します。すでに御存知の方も多いと思いますが、まだ御手にとっていない方のため、あえてここで紹介します。

・「ケルト幻想物語集」全3冊、W・B・イエイツ著、月刊ペン社「妖精文庫」刊。1200円、1300円、880円、この本は、アイルランドが生んだ詩人W・B・イエイツ（1865～1939）が、前世紀末にアイルランド各地に伝わる妖精談、民話を、資料から、あるいは口伝により集めたものを英訳、編集したものです。ここでは彼は、詩人としてよりも民間伝承承継者としての態度であっています。なお、ドノバンは、H・M・Sでイエイツの詩「さまよえるエーンガスの歌」に曲をつけて歌っています。

・「スコットランドの民話」上下2冊、ダグラス著、現代思想社「古典文庫」刊。980円。  
前者は、大正時代の復刻版。後者は、日本人著者がスコットランド留学を通じて学んだスコットランドという一つの国、概念についての詳しい説明があり、各話の解説、他国の昔話との比較対照なども述べているため、こちらの方がベター。

・「英国の民族舞踊」池間博之著、不明堂出版刊。1800円。

ジュークやリールには当然のことながらダンスが伴われますが、日本にいる限りでは、滅多に見られないものです。この本は題名のとおり、イギリスのダンスの教訓本ですから、さし絵を通して、あるいは実際に踊ってみて、いくらかでも理解することができでしょう。

・「リング畑のマーティン・ピピン」「ヒナギク野のマーティン・ピピン」エリナー・ファージョン著、岩波書店刊。1600円、1700円。

最後にファージョン女史のあまたある作品の中でも優れている2つのマーティン・ピピンをあげておきます。この2冊の本で彼女は、マーティン・ピピンという吟遊詩人に南イングランドに伝わる昔話をいくつも語らせています。言わばトニー・ローズの世界か。

必然的に民話の本の紹介が多くなってしまいました。バラッドと民話は、その発生段階において、互いに時を同じくしているからであり、切り離せない関係にあるからです。

(兵藤 充孝)



## “Folk News”

Melody Maker の Folk 欄でおなじみの Karl Dallas が、昨年6月より、英国の Folk Scene を中心とした20～30ページの月刊“Folk News”を発行しています。Folk Review とくらべると、ずらとくだけた内容で、我々にとってはとっつきやすく、非常に興味あるものだと思います。日本からの購読料は船便で¥4,800

(年間)、船空便で¥10,600、発行先は、  
Wishcastle Limited,  
28 Gordon Mansions,  
Torrington Place  
London WC1E 7HF

(小川 彰)

# ALBUM REVIEW

## MARGARET CHRISTL

これはカナダのオンタリオの超マイナー・レーベルが今春発表したレコードで、この若い女性シンガーも当然カナダ人ですが、内容は一聴したところ殆んどブリティッシュ・トラッドの世界と言っているもので、ここでは“The Cuckoos Nest”や“Macrimons Lament”等々といったスコティッシュ、アイリッシュ、イングリッシュの有名なトラッドに加えて、“High Germany”や“The Bonny Bank of Airdrie-O”のカナダ・ヴァージョンを聴くことができるのです。もっとも、こうしたバラッドがカナダでも歌い継がれていること自体は意外なことではありませんが、注目すべきは彼女のシンギング・スタイルで、ちょっと、初期のフランキー・アームストロングを思わせると言えはいいのでしょうか、アメリカやカナダの女性シンガーはジーン・リッチーの様なスタイルでバラッドを歌うものとはかなり異なっていて僕には彼女の“ハード”なシンギングは驚きでした。

実際このアルバムはどことなく“Lovely on The Water”のカナダ版と言った印象を受ける程ですが、これは彼女のようなシンギングをするシンガーがカナダには大勢いるという訳ではなく、彼女がアームスト

## “Jockey To The Fair”

(WOODSHED WS009)

ロングからのシンギングを完全に意識して自己のスタイルをつくっているという事なのでしょう。とは言っても、彼女の歌にはまた、(Black Hawk Newsで木下さんも書かれていた様に)どこか広大なカナダらしい“伸びやかさ”、“大らかさ”があって、ブリティッシュ・トラッドのあの“暗い、圧倒的な緊張感”のみを求めるならば不満ですが、これはまた別の魅力であり、味わいであるといえるのです。

自筆のライナーを讀むと彼女はかなりの勉強家(彼女はいわゆるシンギング・ファミリーの出身ではない)完全なリバイバリストらしい)であることが伺えますが、不満といえはむしろトラッドを歌うことにあまりに懸命になっていて、まだ真に自分の身体から歌が自然に出てくるという境地にまでは至っていないところでしょう。しかし、デイヴ・アンド・トニー・アーサーがトラッド勉強中といった1作目の後にあの素晴らしい2作目を造った様に彼女も将来きっと決定的なバラッド集を発表するに違いないと思います。

興味の尽きないシンガーの興味の尽きないレコードです。

(白石 和良)

## FAIRPORT CONVENTION

新生フェアポートの2枚目。前作に較べるとかなり良くなったと思いますが、全体的に軽い印象を受けます。構成はベックの短いインストが3曲とアラン・テイラーの曲以外はトラッドで、そのトラッド量はリージ&リーフに匹敵します。前作同様、ここでもロングバラッド(JACK O'RION)を扱っていますが、その選曲、処理の仕方に疑問が残ります。

今春、イギリスに行かれた小川氏の話では、アレス・ローランドぬきのドラムレス・フェアポートでステージを演っていたそうですが、ここではやはり彼が叩いています。彼のドラムスは相変わらずで、フェア

## “Tipplers Tales”

(VERTIGO 9102)

ポートの音にはなじまないような気がします。

前作で高い評価を受けたサイモン・ニコルのボーカルは一段とうまくなり、このアルバムでもハイライトといってもよいでしょう。余談になりますが、ちょっと前まで彼はパンクの格好をしてステージに立っていたそうです。また、スウォーヴリックは俳優としてテレビ・ドラマに出ているそうです。

「フォー・ワ・ロックは終わった」と言われている中で、やっと“復活”のぎざしを見せてくれたフェアポートのこれからの動向が期待されます。

(護 仁)

## THE ALBION BAND

## “Rise Up Like The Sun”

(HARVEST SHSP4092)

アシュレイ・ハッチングスという人は、いったん好評を博すと、次からは端を売るような作品を創る人だったのでしょか？それとも、これは、シャーリー・コリンズと別れた痛手から立ち直れないで、すべてをジョン・タムス（プロデューサーとしてジョー・ポイドと共に記されている）に任せて創った作品なのでしょうか？この作品は、聞く者にそんな感を与え、これまでアシュレイ・ハッチングスがリーダーシップを取ってきた作品にはかいまみられなかった、彼の印象が希薄なものです。まず解せない点は、すべてのアレンジメントにおける過大な使い入れです。前回の“Prospect Before Us”でも幾分感じられたことなのですが、その感をより一層深め、トラッドの解釈を拡大し過ぎてしまった点です。つまり、彼らはここで、トラッドをいかに社壇に、又いかに劇的に仕上げるかということに終始していて、トラッドの本来あるべき姿をなおざりにしているということです。これは不可解なメンバー・チェンジが災しているとも言えるでしょう。二、三例にとると、B4の“Gresford Disaster”におけるシンセサイザー処理の方法、プログレまがいの一見壮大そうなギターソロ、そこに詩情を感じるこ

はできません。又、多くのヴォーカリストを起用しながらも効果的に用いていない点、等々。次いで解せないのが、前例に付随した選曲のまずさです。なぜここにコルトレーンの“Afro Blue”が必要だったのでしょうか。単なるエキゾティズムから選曲したものとは思えません。現在のロンドンの事情をみると、移民のパーセンテージが増しつづけています。それを踏まえて、現代のアルビオン、大英帝国の楽隊という解釈のもとにバンドの名を変え、この曲まで選んだのでしょうか。確かに伝統は否定することにより、新たな伝統に生まれ変わりはするでしょう。しかし、もしすべての伝統がそうであるならば、オーセンティックなものなど無に帰してしまうのではないのでしょうか。

もっとも僕はあくまでも英国人に対する異邦人としての見方で見ているのであるし、英国でのエレクトリック・トラッドの置かれている立場、そして役割りに気付いてないからこそこんな毒舌をたたけるのでしょう。彼らのやり方は、確かにトラッド音楽を現代のレベルに引き上げる現時点でのひとつの方法であるでしょう。

(兵藤 充孝)

THE ALBION BAND: "Rise Up Like The Sun" (Harvest SHSP 4092).  
Albion Band: John Tams (vocals, melodeon), Ashley Hutchings (electric bass), Simon Nicol (vocals, electric and acoustic guitar), Ric Sanders (violin, viola/cello), Graeme Taylor (electric and acoustic guitar), Pete Bullock (synthesizer, piano, clarinet, baritone sax, organ), Paul Rickert (bagpipes, strings, corries, shawms), Dave Matlock (drums), Michael Gregory (drums). Guests: Kate McGarrigle, Julie Covington, Linda Thompson, Martin Carthy, Andy Fairweather-Low, Richard Thompson, Pat Donaldson (vocals), Dave Bristow (synthesizer).  
Produced by Joe Boyd and John Tams, recorded at Olympic No 1 and Sound Technique Studios.



# B.T.A.S. NEWS

• 2月26日の定例会は、1908年にパーシー・グレインジャーによって録音されたリンカンシャーの民謡歌手、Joseph Taylor の歌を中心にしてマーティン・カーシー、トニー・ローズ、シャーリー・コリンズ、ロビン&パリー・ドランスフィールド等のイングランドのトラッド・シンガー達の特集をしました。

• 3月26日は、イギリスに行かれた小川氏が録音してきたステイライ・スパンのライヴ・テープを中心に行なわれました。

• 4月30日は、24日に他界したサンディ・デニーを追悼する意味で彼女の特集を組み、その後、前回に続いてロビン&パリー・ドランスフィールドとウォータースンズのライヴ・テープをかけました。

• 5月28日は、新譜特集でした。また、久しぶりに会員による演奏が行なわれました(ハイランド・パイプとコンサーティーナとホウイスル)。

• 6月25日の定例会は、“ジャコバイト・リペリオン”特集と題して、チャーリー・スチュアートに関する歌を集めてみました。

• 定例会では、会員による演奏が行なわれます。楽器(歌)に心得のある方はぜひ参加して下さい。

• OAK編集部では、原稿と編集部員を募集しています。原稿はトラッドに関するものならば何でも構いません。特にこれからは、アルバム・レビューをふやしていきたいと思っておりますので、みなさんのフェイスバレット・アルバムを、新旧、多少にかかわらず紹介して下さい。編集部員に関しましては、東京近郊の方に限らせていただきます。

“ブリティッシュ・トラッド愛好会”

British Trad Appreciation Society (B.T.A.S.)

会 長 松平維枝  
 顧 問 東野和子  
 運営委員 森 能文、遠藤斗志世、白石和良、  
 大山 聡、薄 仁、兵藤元孝  
 協 力 ブラック・ホーク、オバシ  
 新宿レコード  
 連絡先 〒150 東京都渋谷区道玄坂2-18-3  
 ブラック・ホーク内  
 “ブリティッシュ・トラッド愛好会”

定例会

• 毎月最終日曜日  
 • 12:00AM~2:00PM (11:00AMから来店可能)  
 • 場 所: ブラック・ホーク

“OAK - British Trad Review” No. 4

発行人 ブリティッシュ・トラッド愛好会  
 編集人 薄 仁  
 版下製作 薄 仁

OAK - British Trad Review is published  
 by British Trad Appreciation Society  
 c/o Black Hark 2-18-3  
 Dogenzaka Shibuya-ku Tokyo, Japan

1978年7月30日発行  
 © <無断転載を禁ず>

定価 100円